

武家の作法美と品格 折形からわかる日本文化

山根折形礼法

宗主 山根一城氏

室町幕府時代の口頭伝承による門外不出という厳しい条件の時代を経て、江戸時代には広く生活の中にまで浸透していった折形(おりがた)。形成された室町の時代、折形のツールである紙を使える人は一握りに過ぎない高級なものであり、庶民にまで普及するようになった頃は何度も再生され、利用目的によって使い分けられていたという。平成28年度夏季講演会(8月25日開催)で講演した山根折形礼法の宗主・山根一城氏『武家の作法美と品格』から、要旨を紹介する。

文責プリテックスステージ編集部

礼法は、相手のために何ができるのかということ

礼法研究家だった父(山根章弘氏)の他界により、父の著書を読んで初めて、日本から消してはいけない文化があると思いました。そこで私は次男ですが、父の仕事を引き継ぐことを決めました。そして、日本文化の価値観や、どのように伝承され、何が魅力なのかといったことを研究しています。今では全国にお弟子さんがおります。

本日のテーマ「品格」ですが、洗練された階級社会のトップの人の行動、しぐさ、感性、これが折形(おりがた)に通じます。そして、最近ではお中元などは、デパートから送られてきたリストから商品を選んで、一気に送る方も多いと思います。しかし、本来は、どんなに忙しくても、またどんなに偉い人でも自分自身の時間を使って、相手のためにこうしたものを準備しました。礼法の基本はこうした相手のために自分が見えないところで時間を使う、努力をすることが大前提です。「馳走」という言葉があります。幼稚園でお食事の時間に、先生が子供たちに「いただきます」と号令をかけたことに対して、親から「なぜ給食費を払っているのに、「いただきます」というのか」というクレームがあったという話があります。

クレームを言った親と、それに反論できなかった先生は、「いただきます」の意味を、間違えています。「いただきます」とは、自然界の生き物の命をいただくことへの感謝の意味です。

実は、「いただきます」と「ごちそうさま」という表



講師 山根一城氏

現は、他の国の文化にはありません。「馳走」の本来の意味は、客人をもてなすために珍物(おいしいもの)をもとめて走り回り、食物に限らず、様々なもてなしの準備をすることで、「馳走」とも、「奔走」とも言います。客人のために走り回って、まるで何事もなかったかのように、さりげなくふるまう。でも、その裏には用意周到な準備があるわけです。お茶会などで見られますが、半年、1年をかけて、掛け軸、庭の手入れ、焼き物など、その日のために準備します。これは日本の最高の文化だと思います。

また、日本では本来、和紙を階級別、目的別に使います。こうした国は他にはありません。約600年前室町幕府の3代将軍足利義満は、日本文化の原点を生んだ人ともいえます。最初に折形を使った人は、室町幕府時代の将軍、大名と旗本で、この3階級だけが利用し、門外不出のものでした。折形については、口伝で伝えられ、文章では伝えていません。折形で唯一残っているのが、「のし紙」です。

足利義満将軍は野心的で、最終的には天皇を超えるところまでいきます。相国寺(金閣寺)は、京都御所の真北、天皇を見下した位置にあり、豊縁にも天皇が使う縹縹縁(うんげんべり)という特別の模様を使っていました。実質の天皇が足利義満だったともいえます。

この室町時代には、畠山、細川、斯波という御三家がありますが、この御三家は軍力のお家です。一方、文化面を担ったのが、中(うち)の礼法、殿中の礼法を任された伊勢家、弓馬の作法について担当し



折形教室のパンフレット

た小笠原家、そして、今川家が教養をまとめました。この御三家が、将軍に教えたり、大名に指南する名家です。いずれの家も、口頭口伝で600年ですから、一子相伝の世界です。

昔は、紙は非常に貴重なもので、使えることはステータスでもありました。将軍や天皇は紙が決まっておき、紙を一目見ればわかるため、天皇は名前を書いておりません。その紙は、天皇が使われるという決定事項だからです。武家と公家と高貴なお坊さんしか紙は使えなかった時代から、江戸時代に豪商が登場し、この人たちを加えた4クラスが、文化の頂点を引っ張っていきます。

江戸時代のSNS「井戸端会議」で拡散

戦国時代が終わり、江戸時代になると、階級社会もいよいよ加減になり、武士はリストラされます。当時の収入ですが、例えば、下士や足軽などになると年収は、今でいう15万円、月収1万2,000円、1日400円の生活です。非常につらかったと思います。江戸城に出勤するのが、月に2～3日です。日当制であるなら7,000円から1万円をもらって、2日～3日しか出社しないようなものです。

こうした時代になって、紙が一般に広がっていきます。誰が広めたのかというと、門外不出なのですが、一般の農家が紙を漉いています。農家は、農閑期に、桑科のコウゾ(楮)、梶の木(カジの木)が落葉した後、12月末に根元から切って、皮を剥ぎ、それを叩いて、水の中に入れて、漉いてできるのが和紙です。主に原料はコウゾ(楮)です。北海道以外の全国で、紙を漉いています。

そう考えると、技術的にそれほど高いものではない。農家にとっては副業なので、中には手を抜いたりする家があります。本来は800回叩くところ、200

回しか叩かないなどで粗雑な紙が出てきます。それが、一般でも安く買えるようになり、下級武士も買えるようになります。やがてそれが、耳聞き伝承の井戸端会議によって一般にも広がっていくわけです。井戸端会議ですから、薄く広く、今でいうSNSです。しかし、これも口頭伝承なので、どんどん間違っ

て伝わっていきます。紙と共に折形についても、一緒に広がっていき、寺子屋などで習い始めるようになります。特に、食えない武士が、寺子屋で教えるようになり、流派がたくさん登場し、広まっていきます。すると、日本人はとても器用ですから、折った形が面白いと、子供と女性が遊び始めます。これが世界でも有名な「折り紙」遊びです。折り紙の業界では、私たちのことを礼法折り紙といいます。遊びと礼法では折形に違いがあるからです。

明治時代まで女子や子供たちは必ず折形を学びましたが、第二次大戦後、マッカーサーにより消されます。それは、日本の非常に強いロイヤリティであり、統一された愛国心、礼節を重んじる思想が、アメリカ軍にとって怖かったからです。そこから、日本は西洋文明に色を変え、日本古来の教えが消えていきます。近年になり、折形は百貨店のサービスとして、物を包んで無料で届けるスタイルで登場します。

伊勢貞丈の名著作「礼節」

室町時代、幕府の政所執事は、法務大臣、財務大臣、総務大臣、将軍を育てる家庭教師の役割も行いました。この家柄が伊勢家です。なお、室町時代について、ほとんど言及されていません。研究資料があまりないからです。

日本第一級の礼法学者が、伊勢貞丈です。江戸時代中期、伝承してきた内容について著書にして、一生をかけて残して行きました。彼は、歴史の中でナンバーワンの礼法学者で、残した著書は172冊です。そして、徳川の時代になると、小笠原家が中心で礼法を教えることになります。小笠原家本来の弓と馬は、鉄砲伝来で失業してしまい、礼法に切り替えていきました。この小笠原家が、女性や子供に広めていったという大きな功績がありますが、元々は伊勢家による功績です。

江戸幕府の3代将軍・家光の頃まで、伊勢家は幕府の指南役として、完全にアドバイザーとして、会社でいう相談役のような役割でした。それだけ学識者の家系でしたが、政治が下手で、長いものに巻かれる性格ですね。だから著書を読むと、ピシッと

した内容の、スカッとした文が残っています。

伊勢貞丈が残した、2,350項目の礼法のマニュアル、手順書きに「礼節」があります。江戸の中期に発表されたものです。ほとんどの百科事典を研究すると、ここに辿り着きます。伊勢貞丈の2,350項目からなるマニュアルは、その後、出版され多くの人を読めるようになりました。「礼節」の中の第1章第1節に「礼節ということは、貴き人をば慎み敬い、卑しき人をばあなどらず、同じくらいの人をば、人を先立てて、我はへりくだるを礼という也。敬うまじき人を敬うは、へつらい也。卑しむまじき人をいやしむるは、おごり也。へつらいもなく、おごりもなく、その身の位相応にして、過ぎたることもなく、およぼざることもなく、よき程なるを節という也」。これが、礼節の定義です。

こういうことが明確に書いてあります。これが、折形に関する原書になります。江戸時代の幕府の幹部が書いている文章ですが、こんなすばらしい礼法学者はいません。

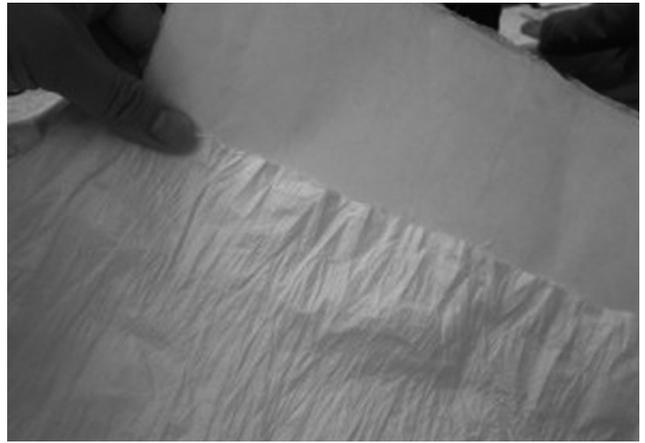
なお、礼法に関する折形についても、図面が少し書かれてあり、文書は少ししか書いてません。これは、基本的には教えませんということです。書かれている展開図を、コピー抵大して折ってみました。全然違う寸法なので、形にはなりません。絶対に解らないようになっていきます。ですから、こういう形を伝承しましたということにすぎません。一子相伝だということです。

紙には“格”がある

紙の格という言葉が出てきます。紙の格なんていう概念は、他の社会にはないと思います。紙には、大高、中高、小高檀紙、あるいは大奉書、中奉書、小奉書とあり、この3種類を使い分けると書いてあります。

檀紙とは、奉書紙の分厚いものに、皺(しぼ)という「しわ」をつけたもので、将軍や天皇がもっとも大事な儀礼のときに使う紙です。こうした和紙は、世界で最も美しく、最長保存できる媒体です。1,500年保存でき、虫が食いません。今のパソコンはどうか。メンテナンス期間が8年とか、ハードディスクやUSBがどこまでもつでしょうか。1,500年もち媒体は和紙くらいです。そして唯一、皆さんのお財布に入れている最高の和紙が、ミツマタに、少し麻を配合した1万円札です。福井県越前で漉いている造幣局の紙、局紙といいます。

日本は独自だといいますが、室町時代は、6割く



紙のサンプル

らいが外国人だったという記録があります。京都が遷都して江戸にくと、京都の町にも外国人がいっぱいたったという記録があります。いずれにしても、当時は朝鮮半島経由で大陸の情報が入ってきます。北はロシア、カムチャッカ半島、北海道のアイヌ、東北、そして江戸経由で京都に入る。南は沖縄から、九州は朝鮮半島から。すると、モンゴル、中国、朝鮮、インド(天竺)、ラオス、ベトナム、フィリピン、そして一番端はイスタンブールの情報もたらされました。砂漠の文化まで陸路を通して、何百年もかけて日本に色々な文化が入ってきたのが平安王朝までです。

正倉院は輸入文化の宝といいます。それが、遣唐使・遣隋使がなくなり、輸入のお宝が入らなくなり、京都の時代に移ります。やがて、輸入文化に刺激を受けて、自然界の豊かさに気がつくのです。

シーボルトが集めた植物の7割が日本から

シーボルトが日本から持って帰った和紙を、一昨年、研究員として調査しましたが、ジャングルでない温帯地域で、こんなに沢山植物と花がある国はありません。シーボルトがオランダに持って帰った観葉植物の70%は、日本から持っていったものです。すばらしい自然界があるということです。この恵みを、自然界を尊重し、自然の中の動物として、私たちは生かされているから共生しようという考え方があります。日本文化は受身です。ありのまま受ける。豊かな自然と季節があるので、感性が世界一だと、イタリアもフランスも尊重しています。

日本人は七十二候、二十四節季、四季の変化をみているだけで、絵がかけて歌がよめます。これが日本の感性で、こういう言葉はほかにはありません。二十四節季は、種をまく(芒種)など、農業のカレンダーで、太陽と温度の関係を表していることがわか

ります。四季と、二十四節季をあわせた言葉が「季節」です。七十二候と二十四節季を合せた言葉が「気候」です。

自然界の色といえば、草木染です。庭の緑の色だけでも何種類あるでしょうか。日本には、緑色が50種類くらいありますが、この感性を見分けられるのが特長です。虹の色も、海外ではほとんど3色です。中間色の定義がないのです。そういう意味でも、色の感性はすごいと思います。この感性は、育てていくものです。

公家と武家では、紙に対しても異なる文化が育まれていきます。公家はほとんど外出せず、ずっと室内で生活しており、デリケートで優雅で品性がある文化を重んじます。一方武士は、外に出て仕事をします。戦国時代から、野営をし、松明をたててという状況下にあります。馬で手紙を運ぶ時、雨が降ってきたら大変です。しかし、雨でへたらないのが和紙です。雨が降って、濡れてしまって文字が消えてしまったというのでは駄目なのです。そのため、武士の使っていた紙は、絶対に破れない、文字の消えないという紙を扱っていました。

ちなみに、庶民の文化は正反対です。着物もそんなに要りません。庶民に許されたのは木綿で、色は藍しか使ってはいけませんでした。だから藍染の風呂敷が庶民主体で広がったのです。一方、絹の最上級のもので、小さいものが紙紗になります。それを絹のひもで結び、模様や編み方を工夫していったのが公家ならば、武家は紙とコヨリの組み合わせです。紙は非常に繊細なもので、フランスでは真珠の紙と表現されています。特に雁皮(ガンピ)は非常にきれいですが、武家では非常に厚い紙を使っていました。

コウゾ(楮)を使った紙で世界一薄い紙、1,000分の3mmくらいの典具帖紙(てんぐじょうし)は鼻紙です。よく懐紙(かいし)や畳紙(たとうし)があります。鼻をかむほかに、武家としての必携品の一つです。懐紙は、お皿として、手紙を書くものとして使いもします。手紙はコミュニケーションの道具として必要ですから、武士は、扇と刀と“懐紙”を持っていました。これらの紙は、何度も洗って使います。ちなみに、典具帖紙は、イタリアの壁画修復で、洗う時の道具として使われました。

一方、今はありませんが、将軍だけが使えた紙を復元しました。これは、2枚、3枚と漉いて、乾く前に貼り合わせた厚い紙です。目がつまっております、重く、水が抜けません。通常の奉書紙で100分の18mmくらいですが、この紙は100分の50mmありま

す。普通の奉書紙であれば、1日に平均180枚漉くことができますが、この紙は3枚です。ですから値段は60倍になります。昔はこれを作っていたのです。厚いだけでなく、簡単には破れません。この強靭さこそが将軍のパワーを象徴したものでした。特に3代目将軍・家光の紙は非常に厚いもので、100分の55～58mmあり、紙というよりも乾いたテントのような感じです。

揉み紙というものがあります。揉んでしなやかにして、吸湿もいい、保温性もいい、やわらかい。さらには柿渋を塗ったり、キリ油(桐油)を塗って雨合羽にするという使い方もありました。コウゾ(楮)を顕微鏡で見ると、用紙のパルプとは全然異なるのがわかります。だから切れ難いのです。こうした様々な技法からは、和紙は絹と同格だということがわかります。

草木染で染めた薄い紙がありますが真珠の輝きです。お公家さんの十二単(じゅうにひとえ)はこれを重ねる。重ねると、間にスペースができ、光があたります。間に距離があるのでその結果、反射します。自然光がお互いに反射し、光の合成が色になってきます。見る角度、時間によって色が違うのが本物の十二単です。素材の美しさがありますが、これが日本の美です。

非常にデリケートな、王朝つぎはぎというものがあります。公家は紙をお金を出して買いません。自分たちで漉いてつくります。残った部分ももったいないので集めて貼り合わせていく。このつきはぎには、十何種類も技法があり、一切、貴重な紙を捨てないための文化です。一家に一枚、唐など外国から伝わった高麗の紙や唐紙があり、非常に高価でした。これを使って、ラブレターを出すとか、物を包む。これに、一つ歌をうたっていくのが公家です。自然界を大事にしていることがわかります。

日本人は、紙を大切に使ってきました。日本のすばらしい自然が背景となって、和紙文化が発展し、日本独自の文化がつけられていったのです。

コウゾ(楮)：クワ科の落葉低木で、樹皮の繊維が強く、和紙の原料とされる

雁皮(ガンピ)：ジンチョウゲ科の落葉低木

キリ油(桐油)：東アジア産のアブラギリやシナアブラギリの種子から抽出した植物油

出典 ニュープリンティング株式会社
月刊プリテックスステージ2016年10月号